



# ひとみすこやか



とだ眼科通信 vol 6 2014 4

## 印象派画家クロード・モネを知っていますか？

今回のとだ眼科通信は名誉院長より、歴史上の有名人と眼疾患の関わりについて寄稿頂きました。

### “白内障に悩んだ画家クロード・モネ”

#### ・傑作の発表と製作に影を落とした視力障害

19世紀後半のフランスの印象派画家クロード・モネは睡蓮の連作などで世界的に有名で、ご存知の方も多いと思います。

彼は1840年パリに生まれ、幼いときは港町ル・アーブルで育ちます。19歳でモネは画の勉強のためパリに出て本格的に画の制作を始めます。1874年、彼が友人のセザンヌ、ドガ、ルノアールなどとパリで開いた展覧会は大反響があり、彼が故郷のル・アーブルを描いた作品“印象・日の出”は注目を浴び、後に彼らが印象派と呼ばれる所以になりました。

この画は朝日が生み出す赤くて美しい空と運河の青い色が鮮やかに描かれていました。1887、モネはジベルニー村に永住し、連作“積みわら”を製作し、次に自宅に日本風の橋をかけ、池に咲いた睡蓮をこよなく愛し、1900年有名な“睡蓮”の連作を精力的に描きます(図1)。



図1 「睡蓮の池、バラ色のハーモニー」  
日本の浮世絵に影響を受けたと思われる橋が後方に描かれている



図2 「日本風の橋」  
白内障の影響で視界全体がセピア色に色褪せて見えていたと推察される

この頃の画は森の緑樹、池の青い水面そして白い睡蓮が幽玄な雰囲気漂わせています。しかし彼が70歳頃から両眼の白内障が進行し、色彩感覚が衰え、次第に彼の画はセピア色になり、輪郭もぼやけた画になり(図2)、やがて画の制作ができなくなりました。

## ・白内障の手術を受けたモネ

当時、フランスでは近代的な白内障手術がすでに始まっていて、鋭利なメスで角膜を切開し、針で水晶体嚢を切開して、水晶体の核を創口から圧出させる、いわゆる嚢外摘出術が施行され、角膜の傷口を絹糸で縫合する事も行われていました。しかし当時は抗生物質が無くて、術後の感染症も多く、失敗例が多かったので、モネも長い間、手術を迷っていました。しかし、当時のフランスの首相クレマンソーの勧めもあって、彼は遂に1922年(大正11年)82歳で右眼の白内障手術を受けました。手術は幸い成功し、彼は画の制作を再開しました。当時、眼内レンズは開発されていなかったため、術後に度の強い凸レンズの眼鏡を掛ける必要があり、長時間の仕事をするにはかなり眼が疲れたはずですが、しかし1925年モネは友人に次のような手紙を書きました。“私は元気です。嬉しい事にまた眼が見えるようになりました。それで夏中ずっと喜び勇んで、これまでにないほど熱意をこめて仕事をしました”。

1926年(昭和元年)モネは86歳で永眠しましたが、彼の残した連作“睡蓮”を始め数多くの作品は世界中の人々に愛され続けています。因みに上野の国立西洋美術館にはモネが1916年に画いた“睡蓮”が展示されています。現代人は超音波手術、眼内レンズ挿入術のような安全・確実な白内障手術によって、僅か数日で快適な視機能を回復できるようになり、天国のモネはきっと羨ましがっていることでしょう。



とだ眼科 名誉院長

箕田 健生

49歳時のモネ、院長と1歳しか変わりません！

100年もの時を経た現在、白内障手術は劇的に発展をとげ、安全かつ患者さんの満足度も高い手術となりました。

更に100年後にはどれだけ進歩しているのでしょうか？

眼科医として興味は尽きません



### 診療時間

月～金

午前 9:00～13:00

午後 15:00～18:00

4月から変わりました！

土

午後 14:00～18:00

バリアフリー  
駐車場8台分



**とだ眼科**

☎ 048 (442) 2620

[www.toda-g.com](http://www.toda-g.com)

携帯サイト用  
QRコード

